

旅行記

文化財研修の旅をして

弥生所文化財調査委員  
本会委員  
伊 賀 重 雄

豊前善光寺を訪ねて

（モノ）  
花仙もりの四月十三日、益田先生、柳曾憲、古藤田  
会員と先生、同車して、史蹟会四月の定例研修と  
別に行動して、豊前善光寺を訪ねることとした。

朝八時すぎ、胡小巻、途中野津町王平の九重の塔を見、十時は  
大分市着、トキハで行なわれている伊勢神宮御神宝展を拜観、史  
蹟会の中と暮合、うには時間かすいている。  
いの形でも景色のよい別府湾を右に見て、到着は近づく  
に、北津のフツシユで建設をゆるめ、何回か停車して、よく別府  
と通り抜け、今日、第一、訪向先日出所に入る。

日出所では先十日出中宮校にある大山茶花と見立した。  
弘生町西運寺所在の大山茶花と対比する為にも、貴重な  
見立であつた。樹令四百年、高さ七、六米、枝張東西八  
米、南北九、三米。山茶花を園芸品種として扱つたものと  
しては日本最古と説明板に誌されている。果指定、天然  
記念物である。

豊前におかれてそそる山茶花に、桜吹雪のわか  
るもよしと  
それから同じく思指定の、有名な松屋寺の大蘇鉄を見  
るべく中宮校を後にした。この中宮校のある一帯は地は  
水下公二万五千石の居城のあとで、日出所の史蹟として  
指定されている。

蘇鉄は藩公の菩提寺である松屋寺の本堂前に、日本一

の威容を見せている。樹令五百五十年、幹根の周囲一丈  
八尺（五、四五米）、枝数約九十本からなり、高さ三丈（九、五  
三米）に東京大塚が調査したと案内板に書いてある。弘運  
は寺奥にある水下候衆代の廟を拜観したが、壮大な石造  
五輪の塔で立派なものである。

日出所での見物は古の二か所を終り、車は一路立石に降り、こ  
こでは諸方三郎惟我公が没死された場所と墓所を訪れる。土  
地の人から説明をきいたが、詳らかなことはわかっていない。い  
れは伝説と臆測の域を出ず、現存しているものは國道十号線立石取  
りにはある馬上神社に祠があり、次の文書が記されている。中央に諸方  
大明神宮、向つて右側に「建立奉る」とある、生藤高木会長が  
かつて訪問記にもあり、併せて参照していただきたい。  
私達は最後の目的地、四日市の善光寺を目指し、益田先生は  
車は速度を早められ、途中、宇佐神宮参道の橋を賞でながら、  
今日一日の研究旅行は到ると云う高瀬の橋に迎えられた、恵まれた  
一日である。

目的地の善光寺に着いたのは午後三時前であつたが、  
ここは豊前史蹟善光寺は日本三大善光寺の一つで、梵天山  
法性院善光寺と号し、村上天皇の天徳二年（九五八年）光勝  
空也上人の開基で、天台宗より時宗に転じ、現在は淨土  
宗に属している。私は前に一度、果敢李主催の文化財指  
導者講習会が宇佐で開かれた時、現地研修で訪れたこと  
がある。広大な庭、樹木がきれいに手入れされていて、維持  
がよい。

本堂は国の重要文化財に指定されている。規模は桁行  
五間、梁行七間、重層屋根、四注建唐破風造り、向拜（  
後世の補作）、軒は三重繁垂木、内陣と外陣とに分れ、  
内陣は富貴寺のものと同じ規模で、唯外陣があるので、  
富貴寺は廻り廊下）呼称が多い。

寺内には書院、説教所（布教）、鐘樓等の史物があり、  
現任職は淨土宗門の中で申左の宗義法侶となつてい  
れる棟樑、光明修養会の会誌発行と毎月され、又先師で

ある半葉上人の遺徳を誌した「日本の光」など、本を刊行して一般に頒布されている。

境内には又県重要文化財に指定されている石造塔婆、即ち板碑がある。銘文は次の通り。

諸行無常 古志者相当比丘尼称阿  
長生滅法 聖靈十三廻之忘辰出離  
生滅々已 生死往生極樂平等刹蓋而已

寂滅為深 建武四年丁丑八月二十二日

願主 敬白

とあるが、この板碑の符異女延良頭部が石庇となつてゐることで、銘文の雨露による損傷を保護する意味かと思われ。

また境内芝原田跡に、開山空也上人の級骨立輪塔がある。室町期建立のもので、佐伯青山の潜龍の塔と対比して益田先生が研究されている。

芝原を開き、また上人の眠る埜域も芝原の上

暮れかく春の日、一刻を尊い御寺の中に身を置き、老師の懇篤な御説明を聞き、境内の先松をみ、双とりを益増し、けやき、大木の梢に鳴く小鳥、自然のふとこるへ還つて来たかを感じ、こゝ風情去り難きを道え、道逆また道逆、時刻のたつのを忘れた一刻であつた。

善光寺で感したことは、古刹が三回も宗旨を変えていることであつた。宇佐神宮を中心にして、上代より繁栄したこの寺が、時宗となり、更に浄土宗門となつたことは、日本宗敎史の中で神社と結合した仏閣、かような経路をたどつた実例はそんなに沢山のるものでないかと思ふ。内障の壁画は江戸期のもの、堂裏の寺のそれに比べて後補された部分もある。そのゆえんがこの道にあるのでないかと思ふ。宇佐神宮が上代から、中世まで築いた神仏伽藍が、昭和の現代にこれだけ残され、伝承され

てゐるからである。

次ぎの、とわき起る懇念、然しお別れの時刻である。先師のお見送りを受けて辞去したのが午後五時すぎであつた。津は善前善光寺を後にして一落別府を目指し、途中の、かきく弥生所に寄りついたのは午後八時前であつた。一日平安な旅の出来たので、全く益田先生への懐重運転のおかげと、心からお礼を申し上げる次第である。

内障にかすかおるがむし佛は、うまじやさしき  
阿弥陀仏がま (善前善光寺にて)

(二二二)

日田、秋月、柳川、田原坂とゆく

四月も月夜はすきで、山々は若葉が萌えて、旅行シートンとだけなつた。かたでぐる企画が、いよいよ弥生町の文化財調査委員の研修旅行を三日曜四月二十日に実行することとなつた。益田、古藤、五十川、伊賀、委員四名と旅行の教育委員会仲野主事を加えて、二名の車に分乗して朝六時半、弥生町後場を出発した。途中大分、別府と通過、横断道路を水谷峠までゆき、分岐点から国道三〇号線、玖珠を経て北山田に行き、遠藤にある慈恵の庵を見つ(未舗装で難路であつた)、日田市に着いたのが午前十時十五分。行程百五十一キロ。

日田市では先ず淡窓記念館を訪れたが、日惟旅館で観望することになり、出来方があつた。すぐ隣にある秋風庵を訪ね、管理人に無理にお頼みして見せていた。秋風庵は淡窓の伯父月化が天明元年に建てたもの、淡窓は晩年をこゝ秋風庵で送つた。又入内障に中嶋玉玉のことかかっている。

豊後佐伯 中島益多

入内障 文化十三辰子歳三月四日  
紹介 明石仙次

とある。頼山陽の未訪、詩歌の交換が、この秋風庵で行われたことは有名である。度先、竹林に自生している竹の子が、訪れた私達をその（や）しい、甲冑の装いで迎えてくれていた感じ、依回すること幾度。子玉、三洲うがその青春を傾けて勉強にいそしんだところである。

秋風庵を辞して廣瀬本宅に、広瀬正雄氏の令弟広瀬恒太氏を訪ねる。氏は日田逗留郵便局長、御土史家で特に民俗学に造詣が深く、快く今日の素朴な後を引受けて下さる。

まず月隈公園を訪れる。この辺りも日田代官所跡で、現在は裁判所、日甲林工高等学校がある。日甲林工は私達の同志小野英治君の母校でもある。小野君がこの水明の地で勉強されたことが今も小野君をらしめたものと心ひそかに思った。

日田代官所の支配地の石高は十六万九千石で、宇佐、国東、玖珠、遠くは天草等に支配地をもち、九州探題役でその威権は諸大名の上にあつた。

幕末の名代官塩谷大田郎志義が、陰徳会なる制を設け、災害に備えて米穀を入庫した記念碑が当地にあつたが、今は淡窓記念館の正門横に巨大な自然石が置かれ、その前に幾種した人達の名前と俵数が刻んで為成と止めている。多いのは四十俵、五十俵とある。社会保険の章分け、と広瀬氏は説明する。

月隈公園から龜山公園に至る。我が佐伯藩祖毛利高政が築いた龜山城跡がある。慶長二年の築城で「とりで」の形で、佐伯城に接し、粗野であるが、高政の「眼」のところが、前に三隈川を深澤が、より、西の奥の地である。

七ようどは昨日で、沢山の市民がお弁当持参で一日の清遊を楽しんでいる。公園が市民に活用されていることがわかれ、うらやましい限りである。

日田は盆地で、京都に似た山紫水明の地、淡窓先生のように大火

者を生み、又一線にも詩歌イなしやみが多く、公園内に詩碑や句碑がある。その一つを手帳にとどめる。

狗犬の睨み方へると 推ふるよと 神春

龜山公園を後にし、廣瀬氏の御好意でレストランで食事をしたとき、種々交談して、つきぬ是れを惜しむながら午後一時半、この目的地の日田秋月に何て出発した。

日田竹林の美林を沿道に見ながら幾度か讃歌の声を発した。私は一人ではなかつた。副北は、不安定な地を歩行しながら秋月記念館について午後三時四十五分、行程百九十九キロ。

秋月記念館は我々が期待した大友時代の秋月氏の史料は無く、秋月五万石の城主黒田氏に関する史料、主に甲冑、刀槍、それ以外の古文書であつた。陳列にも心と砕いて居る。度前に織部燈籠があり、五十川氏が興味深く調べた。

藩祖長興が封を此の地に受けて以来、筑城してはその治績見るべきものが有り、明治年間にも川上水舟なる歌人が「秋陽の賦」という歌を作っているが、その一節、

水いや清き會川也  
くもにを公ゆる古処の峯

垂菰城裡 こけ深く  
仰ぎながめる松が枝に

高くかかゆる秋月の  
故郷ぞおれらが生れし地

如何にも自分の生れた秋月がほころしい筈である。云う風にうかがわれ、私は秋月が甘木市でもおまり中心でなく、孤立した土地板と見受けたい。この歌も裏をかえせば、そういう趣意意味しているのではなかつたかと思われ。

秋月七午後三時十五分に終ち、今日の最終の目的地柳川を目指して

田上七を登て八首米に向う。

福岡県は何と云つても九州の雄県、止まい道でも舗装してあり、道々  
両側は何処までも家並がつつき、人口の稠密なことを教えてくれる、  
久米に何時五分到着、行程二三キロ。石橋文化記念館に立ち  
寄る。館内へ道邊にけし止め、花壇、水陸両用の子供自動車も盛ん  
と見て早々にここを待し、柳川についてたか午後五時三十分、行程二六四  
キロ。運搬された益田先生、仲野先生の免苦券は大変なへたと思つた。  
大分よりけるから交通頻繁、乗るべき松達もほらほらする事が度々  
であつた。

宿は河野の若水旅館にとり、今日一日のつかれを風呂でいやし、柳川  
必物の貝社、くるまを女など、馳走に舌つみをして。  
夕食は市販の散策、白秋の詩を一章と口吟しながら、柳と川舟  
の安に目をこらして、春の夜一刻ををみんだ。

第二日 の二十一日は午前七時起床、八時三十七分  
若水旅館出発、まず今日一日の旅が平安で、収穫の多い  
日でありましたことを祈りながら車に乗る。

最初には立花家記念館である旅館御花の見学をした。旅  
館は柳川市新外町にあり、立花家直営の事業でもある。  
立花家十三代十二万石の居館の跡でもある。十時内館と  
ハミと左が先を急がねばなるまいので管理人に左のみ、  
特別のはからいで時向外観覽をゆるして貰つた。花園が  
沃山あり、藤、しゆくやく、ヤつき、霧島つつじなどが  
満開。館の外は深い濠があり平城の面影をとどめ、古り  
し巨木ハ影が水面にうつり道邊おくお左あず、山城とい  
ちかう感じか漂つてゐる。

館内に入り展示品を拜観、初代宗茂公はじめ蒸代ノ甲  
冑が一室に陳列され、實に見事である。洋館は明治三十  
七年——四十年の建築で、材料は大体ケヤキを使つてい  
る。明治時代の華族の生活を偲ぶふすがにはもつてこい  
なもの。古文書等大關からの感状、宗康、秀忠よりの書状、  
一休和尚からの書信等々、珍らしいものが多い。ここも  
秋月と同様、徳川以前のものはあまりなく、立花(戸次)

道雪の藤印があらうらいで、やはり大友時代のものは収  
蔵されていなかつた。  
裏庭の松涛園は見事なもので、仙台松島を模して築池  
したといふこと、樹令二百年以上の松が何百本とあり、楮  
根まことに雄大である。  
午前十時御花を後にして出発、途中北原白秋の生家に立  
寄り、詩碑、帰去来と刻してある白秋詩苑を見た。自壁に北原  
酒造場、数多い白秋の歌がこゝ生地の芳を出し、大樹となつたも  
つと思惟した。  
しづかさま殿のお倉のゐるねずみ  
およみりとら反り またも消ぬかに 白秋  
柳と川舟の柳川、旅の主目的の地と去るに与り、柳の青葉が四  
月の陽光に輝き、妻の穂の昔ままとマツチーで、そよまの田園詩  
を奏でてゐるなりと感した。  
車は一路大牟田を日指し、午前十一時三十分大牟田着。二六九  
キロ、ト申せず、正急へと急ぐ。正急着土崎早六分。行程四九三  
キロも下申せず、国道三号線を植木町目指して進む。

西面の役の古戦場田原坂に着いたのが正午と五十二分  
過ぎていた。行程六三キロ。  
第一の坂、第二、第三の坂があり、第二の坂には谷村  
計介戦死の地記念碑があり、第三の坂をのぼりつめたど  
ころが平地となり、記念館、記念碑、つじ園等がある。  
敵陣の家が保存されており、薩軍がここに据りて官軍を  
なやました台地で、当時を戦況を茶屋主人から聞き、  
又茶屋のあつた台地に熾仁親王の題字に於る記念碑があり、  
佐伯出身の秋月新太郎撰文並に書である。「明治十三生  
十月」と建碑の年月が誌され、「陸軍省六等出仕佐六位  
勲五等秋月新太郎」とある。益田先生が碑文を写真に収  
められる。  
これで今度の訪向地は一応全部消化された形であり、いよいよ歸

路となる

熊本午後一時十五分、八二八キロ。大津所阿蘇見送り茶屋に午後一時三十分到着、ここでおいしい昼飯をいれた。一路阿蘇を目指し、速攻をばやめる。

一ノ宮に着いたのが午後三時五分、行程一三〇キロ。ここには昭和十一年に訪れたことがある。阿蘇と素通りするのには惜しいが、時間都合で他日に調査せねばと事と急がせ、瀬の本、牧ノ戸、由布院、別府、大分、と益田先生の速報は、実に正確に事故なく、弥生町に帰りついたのが午後七時二十四分。今日一日の行程二九三キロ、第一日と合すると、実に五五七キロとなる。

弥生町教育委員会としては、県外研僑ははじめてで、案に良し勉強に打つたと思う。これと糧として所内にある文化財の調査と保存に益々努力を致したいと思う。この雑文が佐伯史談会へ皆さんの御参考、お役に立てば幸いである。(以上)

探訪記

大分市 狭間地区をめぐる

—— 四月定例研僑会の記録 ——

会員 河野 典 一

二月二十日、予定であった定例研僑会は、伊勢神宮御神楽展の最終日、混雑を避けてこれを繰上げ、四月十三日(日曜)急遽変更し、午前八時十分、バスと七時四十分のバスとで自由大分集合した。快晴温暖な天候に恵まれ、探訪日和である。大分バスターミナルには、今日御祭祭下される渡辺克己、藤井幸良の両氏が先着されていて、却って私共が迎えられた。立川先生が御案内になるマイクロバスは、既に改札口で乗車を待っている。九時十分発車、外環通りから中央河を西進、大道通りで左折、新一ノ宮完成した大道を抜ける、夜線になったこの街道は昔の面影は全くなく、モダンな名刺の大きい見事な出来栄にあらわさる。

大分が定着したと説明をきく。後刻見る國分寺に對し、この地に國分尼寺があったと云われる。永興の中心、二十四町から道は分れて古折西進、狭間地区に向う。この附近一帯は古墳が多く、又何代か大給藩主にまつた「イホ」の女おる言伝えの語も伺う。賀束川と左に異道で少し進めば、民家の後方に丑殿古墳がある。丑殿古墳は異指定史跡で横穴式石室、石段は幾分付与出されたりしく、附近の民家に大きな平石があるのが見える。古墳入口に小石仏三四体と、其の前方に古くは小庵の棟が残っている。すぐ近くは民家裏に、五米位の板碑二基と、丑輪落一基がある。何れも鎌倉期らしいとの事であるが、年次が古い力が惜しまれる。それから一キロほど西進して宮苑部落に入ると、河岸段丘上に千代丸古墳がある。横穴式で、天井、横壁、床と、いすれも切り石で畳み、その壁には人と馬の彫刻と彫彫の仏像が幽かに見える。朱色の着地も歴然として見事な装飾古墳である。入口前より新しい水造門から石室へ入口まで約三米位は天井をけなく横壁と歩道は切石で几帳面に敷きつめられ九ノ日、何時の時代にか天井は地人が斜めとったことと察せられる。前方から古墳の頭部屋根の部分を見れば、其の形状からして、前方後円墳であると意見が一致した。此の千代丸古墳は大正九年秋、中津地方で行われた陸軍特別大演習に際し、大分地方に未だ一士官によって発見されたといふことである。

それから、路を引き返し賀束を経て南方國分に向かう。南方はるかに雲山(リヨウシヤン)を望見する。時向か足りイボにないので賀束神社で下車し者略して車中で説明をきく。賀束神社は、前川神社、日御社、祭神日四代天皇に任じ、三